



論点整理

第六章 豊かな学びにつながる 学習評価の在り方 ①

「主体的に学習に取り組む態度」評価の改善 ①

個人内評価への変更

◆ 前回改訂時、「学びに向かう力、人間性等」のうち感性や思いやり等については目標に準拠した評価や評定になじまないとして「個人内評価」で扱うこととし、それらを除いた「主態」を目標準拠評価の対象としたが、理解が難しく目指す資質・能力を適切に反映した評価となりにくい、負担が重い等の指摘もある。

◆ 一方、「学びに向かう力、人間性等」をカリキュラム全体で育てていくことや、そのために主体的な学習の調整を促す課題を意図的に活動に位置付けていくことの重要性は一層高まっている。



◆ 観点別評価の評価観点として存置しつつも、各教科ごとに「目標準拠評価」として行うのではなく、教育課程全体を通じた「個人内評価」として行う方法に改めることにより、過度な評価材料集めを抑制しつつ、多様な子供たち一人一人の良さや成長を自然な形でみとり、肯定的に評価できるようにすべき

◆ 「感性・思いやり」と「主体的に学習に取り組む態度」に分ける必要がなくなるため、評価観点としては単に「学びに向かう力・人間性」とすることが考えられる。

友人は自分を映す鏡

ひと あやま おのおの そ とう おい あやま み ここ じん し
人の過ちは、各々其の党に於てす。過ちを觀て斯に仁を知る。

(訳) 人間の過ちは、それぞれの仲間うちで、引き起こされることが多い。
だからその過ちをよく観察すれば、その人の仁を知ることができる。

出典：「壁を乗り越える論語塾」安岡定子著（PHP研究所）